

公表

事業所における自己評価総括表 (児童発達支援)

○事業所名	児童発達支援センターにこっと		
○保護者評価実施期間	令和8年1月16日		～ 令和8年2月5日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	17名	(回答者数) 13名
○従業者評価実施期間	令和8年1月26日		～ 令和8年2月5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数) 6名
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年2月10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個性を共感的に理解し、児童の成長の足跡を確かに見取るとともに、専門的な立場からの個に応じた課題解決の方策を明らかにして個別支援にあたっている。	児童発達管理責任者はじめ言語聴覚療法士(ST)、作業療法士(OT)、保育士、看護師等が、専門的な立場から児童一人一人の育ちをとらえて連携して日々のチーム支援にあたることにより、課題を解決したり確かな成長につなげたりしている。	専門性の高い職員が、それぞれに更なる高みを目指して研鑽に励んでいる。児童とともに成長できる職員集団であるために、より一層研修等に参加し資質の向上を図る。
2	家族の願いや要望を具現化するための具体策を家族支援プログラムの中に明示し、家族支援の充実という視点を大切にしている。	家庭とのコミュニケーションは極めて重要である。日々の「お便り帳」を通して情報交換を密にしていくことに加え、送迎時の接点時にも保護者と積極的に言葉を交わすよう心がけている。また、保護者支援の中心事業である「さくらカフェ」への参加を呼びかけ、支援向上につながる情報収集に努めている。	定期的な保護者との面談場面を確保し、専門職によるアセスメントを適切に行っていくことが大切である。また、アセスメント結果を計画書に確実に反映させていく。
3	隣接する保育園の園庭や遊具等の施設を共有して健全な園児と積極的に関わり合い助け合いながら、多くの友達と育ち合うインクルーシブ保育(療育)に力を入れている。	隣接する保育園は経営母体が白鷹町社会福祉協議会であり、保育園と児童発達支援センターにこっとでは、相互の運営指針の中で「インクルーシブ保育(療育)」を推進を押し出して業務にあたっている。	健全な児童と障がい有する児童が互いに理解し合い、助け合って生活する環境を一層充実させる。園庭、遊具の共有による遊びの交差を土台として、互いの行事などにも参加し合いながら、より積極的な交流の場へと拡充していく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	受入れ児童の増加に伴って個別指導スペースや協同して活動する共有スペースが手狭となり、安定して活動できる空間と時間の確保が難しくなっている。	活動スペースや療育室の確保という物理的な環境改善には部屋の増築が第一に考えられるが、定員環境に適合した施設でありその点での解決は困難である。現在の施設が有するスペースの効果的な活用という観点でアイデアを絞り出すことが重要である。	マンツーマンの個別支援を必要とする児童へのスペース確保を大切にしながらも、ペアやグループ支援で効果を上げることができる活動を開発し、複数児童で活動できる場を工夫する。また、パーティションでスペースを区切ったり、活動目的に合った部屋作りを工夫するなどの努力も大切である。
2	活動状況を定期的に発信する手立てとし毎日の連絡帳やライン連絡が主な手段となっている。より具体的な学びの様子を保護者にお伝えしていく上で、ホームページやSNSでの情報発信が求められている。	通所児童の増加に伴って事務的な業務量も増加し、お便りの発信やホームページでの情報発信がどうしても後手に回ってしまう傾向にある。	業務支援支援ソフト「ハグ」を4月より導入する。本ソフトを活用することで、保護者支援、保護者連携に係る情報発信ツールや文書のやり取りツールも効果的活用につなげていく。
3			